

特集：子育てのジェンダー平等を問い直す  
——子ども・子育て支援の多様性の視点から

## 「子育てのジェンダー平等」とネットワーク

——女性議員夫婦の事例にもとづく一考察

島 直 子

従来の家族社会学におけるネットワーク研究では、性別役割分業型夫婦が主な分析対象もしくは理論的前提とされてきた。そしてこれらの研究によって、性にもとづいて空間的・社会的に分離したネットワークが、規範的連帯性を伴いつつ、性別役割分業を再生産する様相について明らかにされてきた。しかし、妻も職場ネットワークに埋め込まれる共働き夫婦を対象とすることで、ジェンダー規範から自由な夫婦関係を促進するネットワーク要因について明らかにされるならば、「子育てのジェンダー平等を問い直す」うえで有効な視点がもたらされるだろう。そこで本稿では、東京都特別区議会の有配偶女性議員を対象とするインタビュー調査データをもとに、女性議員の夫婦関係を、彼女たちが議員活動を行う上で埋め込まれる社会関係と関連づけて検証することを試みる。今回の事例から、「子育てのジェンダー平等」を可能にする要因として、既存のジェンダー不平等な育児サポート・ネットワークとは異なる、新たな社会関係の重要性を指摘することができる。

キーワード：ジェンダー、ネットワーク、夫婦関係

## 1. 本稿の目的

「ネットワーク」という概念は、個人がおかれている社会環境を直接的にとらえるうえで、最も有効な分析道具の一つとされている。ただし、従来の家族社会学におけるネットワーク研究では、性別役割分業型夫婦が主な分析対象もしくは理論的前提とされてきた。そしてこれらの研究によって、「夫は職場、妻は近隣」と性によって空間的・社会的に分離したネットワークが、規範的連帯性を伴いつつ、性別役割分業を再生産する様相について明らかにされてきた（野沢 1995, 1999）。

しかし、1980年代後半以降、家族の「個人化」や「多様化」が論じられており、そうした家族変動の主要なパターンとして、妻も職場ネットワークに埋め込まれる共働き夫婦が増加している。これら共働き夫婦が埋め込まれる社会関係について検証することで、ジェンダー規範から自由な夫婦関係を促進するネットワーク要因が明らかにされるならば、「子育てのジェンダー平等を問い直す」うえで有効な視点もたらされるだろう。

そこで本稿では、東京都特別区議会の有配偶女性議員を対象とするインタビュー調査データをもとに、女性議員の夫婦関係を、彼女たちが議員活動を行う上で埋め込まれる社会関係と関連づけて検証することを試みる。なお、「共働き夫婦」として妻が東京都特別区議会議員である夫婦を取り上げる理由は、以下のとおりである。

第一に、議員という職業は「二人で一つのキャリア (two-person single career)」の典型であることがあげられる。「二人で一つのキャリア」とは、夫婦二人で一つのキャリアを達成することが公式および非公式に制度化された職業である。女性の就労が限定される社会では、実質的には、妻の支援を前提とする男性の職業を意味する。夫が「二人で一つのキャリア」に従事する妻は、夫や夫のキャリアにかかわる人々から、夫のイメージや所属組織の利益を高めるための活動を要求され、「代理として」夫のキャリアを経験するのである (Papanek 1973)。そしてその典型である「議員の妻」については、夫や夫の支援者から、夫の議員活動を献身的に支えるよう期待され、彼女たちもその期待に答えていることが報告されている (石井 2002; Pharr 1981=1989; 若田 1981; 山内 2007)。このように「職業役割を遂行する上で埋め込まれる社会関係において、配偶者の支援が所与とされる職業」に、夫ではなく妻が進出するという、より非典型度が高い社会関係に埋め込まれている共働き夫婦を対象とすることで、ジェンダー規範から自由な夫婦関係を促進もしくは阻害するネットワーク要因について明らかにすることがより可能になると考える。

第二に、都市部の地方議会では女性が比較的進出している（大海 2005）ため、事例の抽出と知見の一般化が比較的容易である。これに対し、女性の国会議員は絶対数が少ない。地方議会についても、地区の盟主や世話役が互選されるようなムラ型の選挙がなされる地域では、いまだに女性が皆無の議会がみられる（大山・国広 2010）。

## 2. 先行研究の知見

### 2-1. 性別役割分業型夫婦が埋め込まれる社会関係

1. で指摘したように、従来の家族社会学におけるネットワーク研究では、性別役割分業型夫婦が主な分析対象もしくは理論的前提とされてきた。そしてこれらの研究によって、個人が埋め込まれるネットワークは性によって分離していること、そして男女それぞれが、その性的に閉鎖的な社会関係のなかで、ジェンダー規範から生じる役割期待に応じたり、役割遂行に必要な資源を調達したりしていることが明らかにされてきた。つまり「ジェンダー不平等なネットワーク要因」が、性別役割分業を維持・強化する構造的メカニズムについて解明されてきたといえる。

たとえば野沢は、性別役割分業がより顕著な大都市圏では、夫は空間的に分離した職場に長時間かけて通勤する一方、妻は家事・育児や近隣とのつきあいなど、地域社会における関係維持の役割をもっぱら担っていること、そして夫が職場ネットワークに依存し、妻が援助的な近隣ネットワークに依存する傾向が強いほど、性別役割分業が強化される傾向にあることを見出した。そしてこれらの知見をもとに、「夫にとっての職場、妻にとっての近隣という空間的・社会的に分離されたネットワークが、規範的連帯性を伴って夫婦関係を世帯の外から規定し、性別役割分業を構造的に補強することになった」とする仮説を提示している（野沢 1995）。

たしかに、日本企業の男性労働者は拘束力の強い職場ネットワークに埋め込まれており、これが性別役割分業型の夫婦関係を前提とし、強化していることが指摘されている。たとえば都市サラリーマンが所属する職場ネットワークは、男性には家事・育児責任がないことを前提として、深夜に及ぶ残業や接待、休日出勤、遠隔地への出張や転勤を命じる。また男性自身も、妻が家事・育児を担うことを前提としてこれらを受け入れる。そこで妻たちは、夫や夫の職場ネットワークの期待に応えるべく、家事・育児を一手に引き受けることになるのである（赤岡 1996；小笠原 1998）。一方、妻たちは、家事・育児を担ううえでのストレスを軽減したり、必要な資源を入手したりするためのネットワークを近隣に張り巡らせ

ている（石原編 1999；松田 2008；落合 1993；安河内編著 2008）。

## 2-2. 女性議員の夫婦関係

「二人で一つのキャリア」（Papanek 1973）を支える「議員の妻」については、夫の議員活動を献身的に支援していることが報告されてきた。たとえば地方議会議員から国会議員となった男性の妻は、PTAなどの各種団体を通じて地元の人々との接触に努め、夫の死後は、後援会の強い要請を受けて、息子に地盤を引き継ぐまでの中継ぎとして議員を務めた。選挙では情緒に訴える戦術が用いられることがあり、候補者が妻と娘を連れて演壇にのぼり、家族全員で土下座をして支持を求めた事例もある（若田 1981）。選挙時には選挙区をめぐって得票に努め、当選後は党婦人局の本部や地方支部で積極的に活動する（Pharr 1981=1989）、パーティや冠婚葬祭への代理出席、議員会館での接客、夫の事務所宛メールや手紙への返答といった諸事に、夫の事務所スタッフと綿密に連携しつつ対応する（石井 2002）、また近年においても、支援者から仕事を辞めて夫を支えるよう求められる（山内 2007）といった事例が報告されている。

一方、「議員の夫」については、アメリカの女性州議会議員を対象とする先駆的研究によって、4つのタイプが見出されている。「参加型」は、妻の政治的キャリアを具体的・活動的に支援するタイプである。妻の選挙活動のマネージャーや、議員活動のアドバイザーを務める夫もみられる。「支援型」は、妻が議員として活動することに賛意を示すものの、政治の表舞台で妻を支えることはない。ただし妻の議員活動を後押しするべく、家庭内の家事・育児を積極的に分担している。「黙認型」は、妻の議員活動に賛成だが、政治の表舞台での支援も家庭内での家事・育児も行わないタイプであり、最も多く見出される。「嫉妬型」は、妻の政治活動に反対であり、妻が議員であるために結婚生活に支障がおきているタイプである（Kirkpatrick 1974）。

なお、日本では、政治の表舞台に出て妻を支える「参加型」の夫は少数であると推測される。なぜなら神奈川県下の市町村議会議員を対象とする調査によると、女性議員の場合、夫が妻の決断を尊重する、あるいは「自分の人生だからやりたいことをやれば」として干渉しない、といった夫婦関係が特徴的である。つまり女性議員は男性議員と異なり、「応援」や「協力」といった具体的な支援をほとんど得ていないと推測されるのである（大山・国広 2010）。

## 3. 調査概要

調査は、東京都特別区議会の有配偶女性議員7名を対象として2010年8月～

表1 インタビュー対象者の属性

	夫の タイプ	年齢	在任 期間	最終学歴	夫の 年齢	夫の 最終学歴	夫の職業	子の 人数	子の年齢 (初立候補時)
A	参加型	46歳	2期目	大学	44歳	大学	会社員 (転職あり)	0人	
B	黙認型	55歳	5期目	大学	55歳	高校	技能・労務職	2人	8歳, 10歳
C	支援型	42歳	4期目	大学	54歳	大学	警備員	0人	
D	黙認型	59歳	4期目	大学	61歳	大学院	教員	2人	8歳, 12歳
E	支援型	43歳	1期目	大学	49歳	大学	校正から警備 員へ	0人	
F	黙認型	66歳	3期目	専門学校	68歳	大学	会社員	2人	24歳, 28歳
G	黙認型	35歳	2期目	大学	42歳	大学	会社員	1人	2歳

1) 本人と夫の年齢はインタビュー時。子どもの年齢は初立候補時。

2) 1期は4年

11月に行われた。年齢や子どもの有無、子どもの年齢、所属政党、議員としてのキャリアについて、多様なケースが含まれるよう配慮した(表1)。主なインタビュー項目は、①立候補以前に従事していた政治的・社会的活動、②立候補にいたる経緯、③議員活動に対する夫の支援、④夫との家事・育児分担、⑤妻が議員であることが夫婦関係に及ぼす影響である。インタビュー時間は1人あたり平均2時間、最も長いものは2時間30分であった。すべてのインタビューは対象者が指定する議員控え室もしくは個人事務所で行われ、許可を得て録音した。

#### 4. 女性議員が埋め込まれる社会関係と夫婦関係

##### 4-1. 「議員の夫」に対する周囲の期待とまなざし

2. で論じたように、「議員の妻」は夫の議員活動を献身的に支援するよう周囲から期待される。しかし「議員の夫」については、「議員の夫だからといって、あれをしなくちゃいけないとか、こういうもんだというのはないと思います」、「夫が出てこないからけしからんっていうようなことはない」(D)、「求められないです」(G)、「ないですね」(C)というように、妻の議員活動への支援はまったく期待されないようである。

ただし夫たちは、「議員の夫」であることからまったく自由なわけではない。たとえばG夫妻は職場結婚であり、Gの夫は現在も結婚当時と同じ職場に勤めている。そこでGは、「区議会議員とか政治とかに対してかかわってる人も中に実際に。 (Gが所属する) 民主党なんてどうなのとかを、たぶん会社とかで色々言われたりしたこともあったと思う」と述べる。Fも、圧倒的に保守が強い選挙

区で無所属議員であることから、親しかった隣人が、夫に対して急によそよしくなると指摘する。

またGは、「議員の妻って言われるのは当たり前かもしれないですけど」「私の夫みたいな見られ方するのって、男の人からみたら嫌じゃないですか。だからそういう見られ方して嫌な思いをしてるかもしれない」と推測する。Bも、夫が「Bさんの旦那さん」と紹介されることが多く、「男としてはあまりいい気分じゃないだろうなあって思いますよね」「そこはね、私もけっこう気を使う」という。

#### 4-2. 女性議員の夫婦関係——妻の議員活動に対する夫の支援

カークパトリックは、妻の政治的キャリアに対する夫の態度として「参加型」「支援型」「黙認型」「嫉妬型」の4つを見出した(Kirkpatrick 1974)。しかし今回の調査では、妻の議員活動に反対である「嫉妬型」はみられなかった。妻の議員活動を具体的・活動的に支援する「参加型」は、1名のみ(A)である。残る6名は、政治の表舞台には関与しないが、家事を分担することで妻の議員活動を支える「支援型」(C, E)と、政治の表舞台での支援も家庭内での家事・育児も行わない「黙認型」(B, D, F, G)に分類される。

「支援型」と「黙認型」の夫をもつ6名は、夫が自身の議員活動に関与することを期待していない。夫の支援については「ないですね」(C)、「必要性を感じない」(E)、「求めてもない」(G)など否定的である。さらに彼女たちは、夫に仕事の話さえしないようである。たとえばGは、夫が政治や社会のあり方について頻繁に話題にし、「お前はもうちょっと、こういうとこやった方がいいとかすごく言ったりする」が、「ふんふんって」聞き流している。Fの夫もFの議員活動に関心があり、「頼り甲斐がないからね、そういうことを、とか信用してないからね、言わないんじゃないかとかって、そういうのも何度かありました」。しかし仕事を家庭に引きずりたくない、議会は特殊な世界なのでその場にいなければわからないといった理由から、「基本的にあんまり話さない」。Eも、議員活動が忙しく「もう疲れちゃったから寝ちゃいますみたいな」日々であるため、会話そのものがほとんどないという。

夫に支援を求めない理由については、第一に、夫自身も仕事をもっていることがあげられた。たとえばDの夫は、国会議員の後援会事務局を務めた経験をもつ。しかしDは、仕事が忙しい夫に対して「(Dを支援するため事務所に)べつにわざわざ来なくてもいいわよって言うてる」という。第二に、夫婦といえども思想信条や政治理念は異なることがあげられた。たとえばEは、「家族は一心同体なんて言いますが、私は一心同体だと思っていませんので」「家族だからって言って、代わって(政策を)訴えられるものではないなと思ってます」と指摘す

る。Fも、圧倒的に保守が強い選挙区で無所属議員であるため、親しかった隣人が夫に対してよそよそしくなった際、「自分の考えでやっていますからね」「私のためになんかしようと思って……1票でもと思ってね、お世辞じゃないですけども、そういうふうにしてくれなくていいですから」、「あなたと私はもう夫婦でもね、別なんだから」と、自身の議員活動の自律性を強調した。

これに対し「参加型」の夫をもつAは、他の6名と異なり、夫が自身の議員活動を支援することを望んだ。そしてその実現において、Aの支援者が積極的な役割を果たした。

Aは生活クラブ生活協同組合の支部委員長や理事を務め、環境や食の安全などの地域問題に取り組んでいた。そしてこの活動仲間から、「代理人」として立候補するよう要請された<sup>1)</sup>。夫は、Aが立候補することに「大喧嘩で朝方になっても決着がつかない」ほど大反対だったが、要請した活動仲間も、夫の「政治嫌い」をよく知っていた。なぜならAたちの地域活動は家族ぐるみで進められてきたため、Aの活動仲間と夫は、Aが立候補する以前から「地域の飲み友達」であった。そこで活動仲間は、「私(=A)が苦勞するだろうと思って、皆が(夫の説得を)やってくれていました」。たとえば選挙活動が始まり、夜中まで事務所で作業するようになると夫を誘い、「なんとなくワイワイやって楽しいな、寄りやすいなあっていう感じになって、そのうち役割をふられていくわけですよ」。その結果、夫は「私個人(に対する支援)というよりは、事務所全体でやることを皆で分け合っているメンバーに自然になっていました」。Aは、自分自身、活動仲間たる支援者、夫、という三者の対等性を強く志向しており、「代理人という役割をする人Aを、みんなで作ってるって思ってます。だから、私もそういう(=Aを作る)人。この人(=A)をどうやって作ろうか、どうやって議席に座らそうかということを皆で考えて、作り出してると思っている」と述べる。そして夫は、仲間の働きかけによって「Aを作る対等なメンバーとして、必要なメンバーとして入れられた」という。

Aは、ポスター貼りやチラシ配り、支援者の戸別訪問といった日常的な活動を夫に依頼し、「無理やり、やること全部見せる」よう心がけている。そしてその理由について「お互いに仕事には関心持ち合おうねっていう、それを全部ひくくめてお互いに一人一人人間だからねって」「お互いにやっている仕事を理解しましょうというのを数年かけて努力してきた」と述べる。そして立候補に大反対だった夫を説得し、理解と支援を得て理想とする夫婦関係が形成された要因として、「地域の中の人と夫が仲良く、そこに居場所がある」ことをあげる。議員活動を支える地域活動仲間を夫と共有していなかったら、妻は仲間の支持を得て議員活動、夫は会社勤めと居場所が分かれ、「もしかしたら一緒にいないかもし

れない、必要じゃなくなるかもしれない」と推測する。

#### 4-3. 女性議員の夫婦関係——夫の家事・育児分担

今回の調査によると、夫と平等に家事を分担していると回答したのは、A、C、Eの3名のみであった。夫が家事を分担する理由としては、3名とも、結婚前に夫は1人暮らしだったため家事全般ができること、子どもがいないため家事量そのものが少ないことの二点をあげた。一方、子どもをもつB、D、F、Gの夫は家事・育児をほとんど行っておらず、妻の不在や家事レベルの低下を「黙認」するのみである。しかしGを除く3名は、夫が家事をしないことに不満がない。

たとえばDとFは、自身が仕事を優先しても不満を示さない夫の寛容さをむしろ評価している。Dは結婚・出産後も実母が経営する学習塾の講師を務め、その後、末子が小学2年生のときに区議会議員になった。しかし両親が徒歩10分ほどの近居で、子どもを「半分育ててくれた」こともあり、「(夫に)助けを求める必要はあんまりなかったという感じ」である。議員としての責務は行政側の資料を鵜呑みしては果たせないため、毎晩のようにシンポジウムや勉強会に出席し、情報収集に努めることになる。しかし子どもが幼いころはかなりセーブし、どうしても欠席できない場合は両親に子どもを預けた。夫は、Dが仕事に多くの時間を費やすことについて「仕事っていうのはそういうもんだと思ってると思いますよ……そんなことしてないで、もっと家のことしろとか、ま、そういうことは言われたことはないです」「そのへんは柔軟なので、あの、私としてはやりやすかったかなと思いますけど……家事は完璧にこなした上でやれとかっていう人だったら、私はけんかしてたか離婚してたか」という。一方、Fの夫も、「家のことは一切私任せ」である。ただし夫は「もう今日疲れちゃったからちょっと悪いけど外で食べてくれるっていうと、ああいいよって、そういう時やダって言いませんから」というタイプである。

そしてBも、夫が家事をしないことに不満がない。ただしD、Fとは異なり、「(B議員の夫という)付属物じゃなくて自分自身の世界」を広げてほしいという、より積極的な理由をあげる。4.-1. で指摘したように、Bは夫が「Bさんの旦那さん」と紹介されることについて、「男としてはあまりいい気分じゃないだろうなあ」「そこはね、私もけっこう気を使う」という。ただし夫は社交的な性格で「今日はあっちだこっちだって出歩いて」いることから、「地域とのつながりもいっぱい持ってて、あの一広いですよ。まあそういう中で、まあBさんの夫っていうふうに紹介されることもあるんですけど、Bの夫本人とのつながりのある人」も多い。そして「彼が彼の世界をすごく広くもっているんで、それで私は助かっている部分っていうのはすごくありますよね」「下手に家事とかやってもらうより



も、そうして出てもらった方が私は気が楽ですね」という。

## 5. 考察

東京都特別区議会の有配偶女性議員が埋め込まれる社会関係と彼女たちの夫婦関係について、以下のような知見が得られた。

従来、議員は「二人で一つのキャリア」の典型であり (Papanek 1973)、「議員の妻」は夫の議員活動を献身的に支援していることが報告されてきた (石井 2002; Pharr 1981=1989; 若田 1981; 山内 2007)。しかし今回の調査によると、女性議員は夫からほとんど支援を得ていない。夫が自分を信用していないのだろうと苛立っても議会の話はしない、夫のアドバイスは聞き流すなど、夫の関与を積極的に回避する者もみられた。国会議員の後援会事務局を務めた経験がある夫に対してさえ、「べつにわざわざ来なくていい」という態度である。

そしてこのように「議員活動を遂行するうえで配偶者から得る支援」が男女で異なる一因として、「二人で一つのキャリア」を遂行する際に埋め込まれる社会関係が配偶者に課す役割期待に、性差があることが注目される。なぜなら「議員の妻」の場合、仕事を辞めて夫を支えることや、夫の政治理念や思想信条に準じることを周囲の支援者から強く期待される (石井 2002; Pharr 1981=1989; 若田 1981; 山内 2007)。しかし今回の調査で多くの者が指摘したように、「議員の夫」は「出てこないからけしからん」とは言われないのである。ゆえに女性議員が夫に支援を求めない、もしくは支援を積極的に回避し得る一因として、支援者から「夫婦二人で」議員としてのキャリアを達成するよう強要されないことをあげることができる。

ただし「議員の夫」は、「妻が議員であること」からまったく自由なわけではない。たとえば今回の調査では、保守が圧倒的に強い選挙区で無所属として活動する女性の夫に対して、親しかった隣人が急によそよそしくなったという事例がみられた。自身が議員であるために、夫が職場などで様々な詮索にさらされているのではないかと推測する者もある。さらに、「〇〇議員の旦那さん」と妻の「付属物」のように位置づけられ、夫の「男としてのプライド」が傷ついているのではないかと気遣う者もあった。そしてこのような周囲のまなざしに対して、「あなたと私は夫婦でも別」として自身の議員活動の自律性を強調したり、家事を分担するより「付属物じゃなくて自分自身の世界」を広げることを夫に求めたりしている。これらの点から、女性議員が夫に支援を求めないより積極的な理由として、自身が議員であるために埋め込まれる社会関係において「夫が妻の思想信条や地位・役割に従属する」という、ジェンダー規範に逸脱する位置づけやまなざ

しを避けようとする点を指摘することができる。

そして家庭内の家事についても、夫と平等に分担しているのは7名中3名にすぎなかった。なお3名は、いずれも子どもをもたない夫婦である。残る4名の夫は家事・育児をほとんど行っておらず、妻の不在や家事レベルの低下を「黙認」するのみである。そしてこの4名のうち、夫が家事・育児を分担しないことに不満をもつのは1名のみであった。残る3名は、自身が仕事を優先しても不満を示さない夫の寛容さを評価したり、夫には家事を分担するより、「(〇〇議員の夫という) 付属物じゃなくて自分自身の世界」を広げてほしいと期待したりしている。

これまでの研究でも、子どもをもつと「余分の料理、掃除、洗濯、買い物、縫い物、運転、待機、その他育児によって生じる様々なこと」である「追加的家事」が生じ、それらは母親役割の一環として妻に課されることから (Sokoloff 1980=1987)、女性はたとえキャリア職に従事しても、子どもをもつと、夫と家事を分担することがより難しくなると報告されている (松信 1995)。家事・育児は自分の仕事と思ひ込み、夫が分担しないことに不満をもたない妻や、自身の就労が夫の「男」としてのプライドを傷つけることを気遣って、家事・育児を一手に担い、従順に振舞う妻の事例もみられる (Hochschild 1989=1990)。今回の調査によると、たとえ女性が「配偶者の支援を前提とする二人で一つのキャリア」に従事しても、このような傾向は変わりないと言える。

2. で論じたように、性別役割分業型夫婦を対象とするネットワーク研究によって、個人が埋め込まれる社会関係は性によって分離しており、人々はその性的に閉鎖的な関係性の中で、性別役割期待に応じたり性別役割の遂行に必要な資源を調達したりしていることが明らかにされてきた。しかし今回の調査によると、女性はたとえ政治という「男社会」に参入しても、埋め込まれる社会関係から、ジェンダー規範から自由な役割期待や資源を得られるわけではない。むしろ女性自身が、周囲からの「逸脱のまなざし」を避けようとして、ジェンダー規範を維持・強化する側面もみられる。

しかし今回の調査では、7名中1名(A)ではあるが、夫に対して自身の議員活動を支援するよう強く求める者がみられた。彼女は、議員である自分自身と夫の対等性を強く志向したが、これは「議員の妻」が夫のキャリアを「代理として」経験するという従属性 (Papanek 1973) とは異なる。そして彼女が「対等性を志向しつつ、夫が妻の議員活動を支援する」夫婦関係を実現するうえで、支援者が大きな役割を果たした。Aは生活クラブ生活協同組合の活動仲間による働きかけによって、立候補に大反対だった夫を説得し、「対等なメンバー」として招き入れることができたのである。Aは、活動仲間と家族ぐるみで地域の環境問題などに取組んでいたため、活動仲間とAの夫も、Aが立候補する以前から親しい「飲

み友達」であった。つまりAの支援者は、Aの議員活動を支える公的もしくは組織的な支持基盤というよりも、A夫妻共有の友人ネットワークと位置づけることができる。そして一般的に、友人ネットワークは選択的かつ非拘束的であることから、成員の対等性が担保されやすい（森岡 1993）。ゆえに「夫が対等なメンバーとして妻の議員活動を支援する」という稀有な夫婦関係が形成された大きな要因として、Aの議員活動が友人ネットワークに埋め込まれているという特異性が注目される。

## 6. 結論

今回の知見をもとに「子育てのジェンダー平等を問い直す」ならば、たとえ男性が育児という「女社会」に参入しても、ジェンダー規範から完全に自由な父親像が誕生する可能性は低いことが推測される。「男社会」の政治の世界が男性中心的な社会関係を構築しているように、「女社会」の育児サポート・ネットワークも、女性にとってのみ支援的な関係性を構築していることが考えられるのである。たとえば育児休業を取得した男性は、周囲の母親たちから奇異な目で見られ、子どもも自分も交流する機会をもてないことが報告されている（石井クンツ 2013）。

ただし今回の調査では、ごく稀少な事例ではあるが、夫の支援を得て議員活動を担う女性がみられた。彼女は「二人で一つのキャリア」を担う夫婦を、配偶者がそのキャリアを「代理として経験する夫婦」ではなく、「互いの仕事を理解し支え合う対等な夫婦」と再定義した。そしてそのような夫婦関係を可能にするネットワークに埋め込まれていたことが、理想の実現を可能にした。大半の女性議員が「夫が出てくる」ことをまったく期待されないなか、Aの支援者は、Aの立候補に大反対だった夫をAに代わって説得し、「Aを作る対等なメンバー」として招き入れたのである。以上のような知見から、母親を育児の担い手と見なす既存の育児役割観を再定義し、「子育てのジェンダー平等」を可能にする要因として、既存のジェンダー不平等な育児サポート・ネットワークとは異なる、新たな社会関係の重要性を指摘することができる。

（しま なおこ 国立女性教育会館）

### [注]

- 1) 代理人運動とは、1977年に生活クラブ生活協同組合によって提起された取り組みである。食品の安全や福祉など日常生活の中で認識された課題を共有した女性たちによって、活動仲間を議員（代理人と呼ぶ）として地方議会に送り込むことで、地域你的生活課題に取り組む市民

運動派議員を輩出するとともに、政治を生活の場からとらえ直す視点を議会に届ける運動として展開されてきた(大海 2000)。

【引用文献】

- 赤岡功 1996 「エレガントな労務管理をもとめて——人間性と経済性の高い管理」『組織科学』29(3), 4-14
- 甘利てる代編 1995 『東京における女性議員の議会活動に関する調査・研究』女性と地方自治を考える会
- Hochschild, A. 1989 *The Second Shift: Working Parents and the Revolution at Home*, Penguin (＝田中和子訳, 1990 『セカンド・シフト——アメリカ 共働き革命のいま』朝日新聞社)
- 石原邦雄編 1999 『妻たちの生活ストレスとサポート関係——家族・職業・ネットワーク』東京都立大学都市研究所
- 石井クンツ昌子 2013 『「育メン」現象の社会学——育児・子育て参加への希望を叶えるために』ミネルヴァ書房
- 石井知子 2002 『政治家の器量は妻しだい』日本文芸社
- Kirkpatrick, J. J. 1974 *Political Woman*, Basic Books
- 松田茂樹 2008 『何が育児を支えるのか——中庸なネットワークの強さ』勁草書房
- 松信ひろみ 1995 「二人キャリア夫婦における役割関係——平等主義的家族への可能性」『家族社会学研究』, 7, 47-56
- 森岡清志 1993 「都市的ライフスタイルの展開とコミュニティ」蓮見音彦・奥田道大編 『21世紀日本のネオ・コミュニティ』東京大学出版会, 9-32
- 野沢慎司 1995 「パーソナル・ネットワークのなかの夫婦関係」松本康編 『増殖するネットワーク 21世紀の都市社会学 1』勁草書房, 175-233
- 野沢慎司 1999 「家族研究と社会的ネットワーク論」野々山久也・渡辺秀樹編著 『家族社会学入門——家族研究の理論と技法(社会学研究シリーズ1)』文化書房博文社, 162-191
- 落合恵美子 1993 「家族の社会的ネットワークと人口学的世代——60年代と80年代の比較から」蓮見音彦・奥田道大編 『21世紀日本のネオ・コミュニティ』東京大学出版会, 101-130
- 大海篤子 2000 『地方議会における女性議員の「形成」と意識の変容——生活者ネットワークの代理人の事例より』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 2000年度博士論文
- 大海篤子 2005 『ジェンダーと政治参加』世織書房
- 小笠原祐子 1998 『OLたちの「レジスタンス」——サラリーマンとOLのパワーゲーム』中公新書
- 大山七穂・国広陽子 2010 『地域社会における女性と政治』東海大学出版会
- Papanek, H. 1973 Men, Women, and Work: Reflections on the Two-Person Career. *American Journal of Sociology*, 78(4), 852-872
- Pharr, S. J. 1981 *Political Women in Japan: The Search for a Place in Political Life*, University of California Press (＝賀谷恵美子訳 1989 『日本の女性活動家』勁草書房)
- Sokoloff, N. J. 1980 *Between Money and Love: The Dialectics of Women's Home and Market Work*, New York: Praeger Publishers. (＝江原由美子・藤崎宏子・岩田知子・紙谷雅子・竹中千香子訳 1987 『お金と愛情の間——マルクス主義フェミニズムの展開』勁草書房)
- 若田恭二 1981 『現代日本の政治と風土』ミネルヴァ書房
- 山内和彦 2007 『自民党で選挙と議員をやりました』角川書店
- 安河内恵子編著 2008 『既婚女性の就業とネットワーク』ミネルヴァ書房

謝辞

本研究は、公益財団法人東海ジェンダー研究所による「2010年度団体研究助成」を得て行われました。共同研究者である国際ジェンダー学会会員の大海篤子氏、田中洋美氏、またお忙しいなか調査に協力してくださった議員の方々に感謝申し上げます。なお本稿の執筆においては、不破麻紀子氏（首都大学東京）に貴重なコメントをいただきました。

## **Gender Inequality of the Network Function: Marital Relationships of Female Married Legislators in Tokyo Special Ward Assemblies**

SHIMA Naoko

(National Women's Education Center of Japan)

In family and social network studies, as a theoretical premise or object for analysis of the family of the breadwinner/homemaker and the division of labor, the network factors that maintain the gender roles have been promoted. Recently, however, dual-income families have become more common, so it is necessary also to study these families and the network factors that support (or inhibit) them. Using data collected through face-to-face interviews with female married legislators in Tokyo Special Ward Assemblies, this paper examines the career support female legislators receive from their husbands and the respective buried social relations of the husbands and wives. The analysis reveals that the “gender of the network function” is a factor that inhibits dual-income families. In other words, the “support function of the network” is not gender neutral.

Keywords : Gender, network, marital relationship